

いまできる方法で映画を作る

崙利子 (映画監督、「アジア千波万波」審査員)

関西で自主上映の手伝いをしていた頃に、『草とり草紙』(1985)の上映会で福田克彦監督と出会い、交流が始まりました。いつか映画を撮りたいと思っていた自分にとって、それは福田さんの現場以外にないと思っていたところ、助監督に誘われたので東京に拠点を移しました。助監督をしながら映写技師として勤めていたスタンス・カンパニーの鈴木章浩さんと92年に、「東京レズビアン&ゲイ映画祭」を立ち上げました。ニューヨークの映画祭やアンソロジー・フィルム・アーカイヴスを訪れて、海外のレズビアン&ゲイ映画など面白いものに出会ったものこの頃です。自分たちの映画祭では、海外のものだけでなく日本のLG映画として橋口亮輔や大木裕之、ドナルド・リチャーなどの映画を上映しましたが、まだ女性作家はいませんでした。私が身体を壊してしまい、映画祭は2回で

やめることになってしまいました。

その当時から、購入したビデオカメラ(Hi-8)を用いて、日記のように日常を撮影していました。そろそろ映画を作ろう、編集方法を伝授してもらおうと思っていた矢先、福田さんが亡くなってしまった。98年のこと。最後に会った時に、「毎日、ビデオを廻しているんです」と言うと、「そうですか」と嬉しそうに頷いてくれました。「いつでも相談できる」と思っていた福田さんが急死してしまった。やりたいことは今すぐにやって、会いたい人には早く会っておくべきだ、という思いが原動力となって、『オードI』(1998)を完成させました。いまできる方法で映画を作る。だから、編集も撮影も勉強していません。99年の山形映画祭で上映してもらったときは、満席で、びっくりしました。一見センセーショナルな写真がプログラムに掲載されていた

ので、それで来た人が多かったのかも。SMショーを撮った映画は山形では初めてでしょう。山形映画祭は、作家にとっては映画を作る時の目標になることもあります。私にとって『Blessed』(2001)の時はそうでした。山形で出会った人たちとは今でも仲がいいし、一緒のプロジェクトで作品を作ったりもしています。

10年ほど前に伊丹に引っ越ししました。日常的に撮影は続けていたけれど、どうやって作品という形にするか。柳のように期日を決めて作る、という状況が欲しい。定期的な上映会という形であれば行けるかなと思って、茅場町にあった「ギャラリーマキ」に相談したところ、「いいわよ、じゃあ「季刊タカシ」ね」と。それが2005年から始まり、その後17回、ギャラリーが閉じるまで続けました。この歳になってなんのお金にも名誉にもならなくても作り続けているのは、ずっと見続けてくれた観客と、上映してくれる場があったからのことです。

聞き手=若井真木子
(「アジア千波万波」コーディネーター)

■上映&トーク

「季刊タカシ 2005~2013 ギャラリーマキ in 山形」

10/11 15:00-20:00 | 10/15 13:00-17:00 | 山形まなび館 | 入場無料
東京・茅場町のギャラリーマキで2005年から2013年まで17回継続した崙利子の上映会「季刊タカシ」。その中から「伊丹シリーズ」をまなび館で連続上映します。